
ありえないリアル

桐嶋 空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ありえないリアル

【Nコード】

N1448J

【作者名】

桐嶋 空

【あらすじ】

普段と変わらない生活をしていた芦谷 修。だが、ある日を境にありえない現実になる……？

プロローグ

「何故こんなことになってしまったのだろうか……?」
自分でも分からず呟いてしまった。何故、俺は道端で殺されかけているんだ?

話は今日の朝に遡る……。

「ねえ、ねえ、芦谷君。」

今日、初めて学校のアイドル 永瀬ちゃんに声をかけられた。

永瀬ながせ 小雪、彼女は明星学園のアイドルである。顔はかわいいく勉強もできるといえずごい人だ！ だが、俺は背が高いが顔立ちあまり良くなり勉強もあまり出来ないという人だ。

「な 永瀬ちゃん!? ぼ 僕に何の用かな？」

「今日一緒に帰り道によってほしい所があるんだけど良いかな？」

僕みたいな人を呼ぶのは何故なんだろう？ 僕は、考えつつも返答した。

「僕みたいなのでよければ喜んで!!」

今思うところの言葉が引き金を引いてしまったのだと思う……。

第一話 ありえない力

「はぁー」

僕は朝から疲れていた。

「どうしたんだよ、芦谷？」

今、声をかけてきたのが手嶋悠てしまゆう。コイツは、顔立ちもなかなか良くてそこそこ勉強も出来る奴だが欠点が一つあった。それは……重度のゲーマーだということだ。

「そんなことより昨日さあ、新しいゲームを手に入れたんだけど放課後に一緒やらないか？」

「またゲームの話ですか？」

コイツは口を開くたびに必ずと言っていいほどゲームの話をするという奴だ。だが、情報通でごくまれに活躍する。

「いいじゃん！ゲームをやったら癒されるでしょ？」

「それは貴方あなただけです。」

「そんなことないよ」

「いや、お前だけだ！」

「違うって〜」

「お前は分からないの？僕は今疲れていることが。」

「鈍感の俺が気付くわけないじゃん。」

こんなしょうもない会話をしているうちに僕達が通っている明星学園に到着した。

私立 明星学園は僕達が住んでるところで一番デカイ学校だ。小学校から大学までと続くが授業の進み具合はあまり早くなく本当に私立か、考えてしまう事がある。

昇降口に行くと僕が疲れる元凶がいた。

「あつ、芦谷君〜」

僕が無視しようとした瞬間……

「あ 芦谷！！何故お前が我が校が誇るアイドル永瀬ちゃんと知り合いなんだ！？」

手嶋ああああ！何故食いつくんだよ！

「そんなことより芦谷君！今日の放課後も良いかな？」

「やった今日は手嶋との約束がある」。

「ごめん。今日は手嶋と約束しているんだ。」

「そうなの？手嶋君」

「そ そ そんな約束はしてないから大丈夫だよ。」

「裏切ったな手嶋！いい奴だと思ってたのに。」

「手嶋君は良いって言ってるよ？」

「うっ、分かりました。行きますよ。」

「ありがとう！！！」

「あんなことさえなければ今も好きなんだけど……」

それは昨日の放課後……

僕が校門で待っていると、

「芦谷君、待った？」

「全然待つてないよ。」

本当は1時間は待ったけど……

「じゃ、行こうか。」

「うん！」

僕は永瀬ちゃんと並んで歩いていった。

歩いて行った所そこはオカルトマニアなどで有名そうな廃病院。

「本当にここが行き先なの？」

僕は不安になったので聞いてみた。

「そっだよ！芦谷君には今から私達の仕事を見てもらおうと思って。」

「

私達？」

僕は疑問になったので聞いてみた。

「そ、出てきて良いよアルビス。」

永瀬ちゃんがアルビスと言った瞬間、永瀬ちゃんの後ろが歪んだ。

バリイイイイン

歪んだ所が音を立てて割れた。

割れた所から出てきたのは鳥みたいな生物だった。

「芦谷君！紹介するね、この子が私と契約した悪魔のアルビスだよ。」

永瀬ちゃんは笑顔で言ってきた。

「悪魔って……本物!？」

「そつ、本物の悪魔だよ。」

そんな平然と言われても困りますよ……。

「な　な　何で僕にあ　悪魔なんて物を見せるの？」

「それはね芦谷君にもね私達と同じ仕事をする権利があるの。」

仕事をする権利？訳が分からなくなった。

「しかもね、芦谷君の力はとても強いとアルビスが判断したの。」

判断したって今まで普通に暮らしていた人にそんな力あるわけないじゃんと思いつつも聞いてみた。

「そのアルビスとかいう悪魔は何で僕にそんな力があると判断したの？」

「アルビスには力　正確には神力・天力・魔力の量を判断する能力があるんだよ。」

アルビスの頭を撫でながら言った。

「神力・天力・魔力？」

「神力は神が使う力で、天力は天使が使う力、そして魔力が悪魔が使う力って訳だよ。」

そんなことどうやって信じろって言ってるんだ？

「でね、ある一つの力が大きいと神や天使達と契約できるんだよ。」

「えつ、でも神様や天使、悪魔と特定の者とは出来ないのかな？」

少しずつ理解し始めていたのだが、疑問になったことを聞いてみた。
「決まってるよ。神力が高ければ神と、天力が高ければ天使と、魔力が高ければ悪魔と決まってる。この力を持つ者自体がすごく珍しいけどその中でも神力が高い人はごくわずかなのよ。」
「簡単に言つと僕が持つ力が強いから連れて来たということですか？」

同じ学年なのに敬語で聞いてしまった。

「そっだよ。」

「ちなみに仕事とは何をするの？」

「私達がするのは化物退治だよ。」

化物退治って………嘘だろ！

「さあ、行こう。」

「手を引つ張らないで！」

予想外の強さで引つ張られたのでびっくりした。

廃病院の中はかなり荒れていた。

「うわあ、壁が抉れてる。こんな人の力じゃ出来ないでしょ普通。」

「

「当たり前だよ。こんなことが出来る人間なんている訳ないよ。」
「できる人が居たとしてもこんな所に来る理由がないよ。」

「ここの中に居るよ。」

「ここって………手術室!？」

上に張つてあるプレートには手術室とはっきり書かれている。

「アルビスがここに化力があると言っているの」

「化力？」

当たり前だが知らない言葉だ。

「化力は、化物が持つ力のことだよ。」

「化物にも力があるんだ………」

つてことは、僕も死ぬことがあるってことだよね………

「ごめん、用事を思い出したから行かなきゃ。」

僕がその場から離れようとしたら後ろから

「今更逃げるの？ここまで来たから実力行使もやむ終えないのよ。」
僕はその言葉を聴いて逃げるのをやめた。

「なら行くよ。アルビス！」

アルビスと言う悪魔が変形をし始めた。

「け・・・拳銃！！」

変形した物を見た瞬間僕は声を上げてしまった。

「契約した者はある一定の物に変形するんだよ。神を除いてだけど
ね。」

「そ そうなんだ。」

「やはり神様は別格なんだ。」

「変形する物は契約者の力の量によって決まるんだよ。」

「永瀬ちゃんのは拳銃なんだけど・・・量はどのなの？」

「僕の量が一番知りたいけど・・・」

「私の魔力の量は少ないのよ。」

「えっ、そうなの？」

意外な答えだった。

「そうなのよ。私は魔力の量が少ないので魔力を貯めてから打ち出
せるようにしてある拳銃なのよ。」

「ぼ 僕の量は・・・？」

「後で教えてあげる。中の化物が出てくるよ。」

彼女が言った瞬間僕の後ろの壁が崩れた。

「な・・・なんだこれ！！！」

僕が振り返って視界に入ってきたものは、頭がトラで羽が生えてお
り手足に長く剣みたいいな爪が伸びていた。

「キメラかあゝ、珍しいね。」

「う・・・うわあああ！！！！！！」

僕はありえない現実リアルに声を上げてしまった。

「お・・・お前は・・・誰・・・だ・・・？」

キメラという生き物が低い声で言った。

「私達は貴方を倒しに来たのよ。」

「お・・・前・・・に・・・は・・・は・・・無理・・・だ。」

「僕でも無理なんですけど・・・」

「それはやってみないとわからないのよ。」

「永瀬ちゃん、本当にするの？相手は強そうだよ。」

不安になったので聞いてみた。

「たぶんね。相手の化力も強いから確実にはいえないよ。」

「奥の・・・ガキ・・・お前なら・・・倒せる・・・だろう。」

「なんで僕には倒せるんだよ！」

「アタシも倒せるかもよ？」

「お前・・・に・・・は・・・無理・・・だ。」

だから僕にも無理だって・・・

「アルビス、行くよ！」

「無駄・・・だあ・・・」

永瀬ちゃんは駆け出した。

「はあっ!!」

バン！ バン！

いきなり相手に銃弾を打ち込んだ。

「グツ・・・お前・・・を・・・甘く・・・見ていた・・・」

「相手が本気を出してくるから攻撃を避ける準備をしいた方がいいよ。芦谷君」

「そんなこと言われても・・・」

僕が言うのを遮って

「い・・・く・・・ぞ・・・」

相手飛び出した。

「アルビス！」

永瀬ちゃんが契約悪魔の名前を呼んだ。

すると、拳銃の形になっていた悪魔が鳥の姿に戻った。

「じゃ・・・ま・・・だ」

キメラは悪魔アルビスを簡単になぎ払った。

「なつつつ！」

永瀬ちゃんは驚いたような声を上げた。

「た．．．．．おれ．．．．．ろ」

キメラは爪を向けた

「アルビス！！」

永瀬ちゃんアルビスは悪魔を読んだがキメラの攻撃の方が早かった。

「きゃあああああ！！！！！！」

キメラの攻撃は決まった．．．．

「うつ、逃げて．．．芦谷．．君。」

「僕は何も出来ずに逃げて良いのか？」

僕は考えていた．．．．

「僕は永瀬ちゃんも守りたい．．．．．」

「ガキ．．．．．きえ．．．．．ろ」

目の前が真っ白になった。

【お前の願いは何だ？】

誰かの声が聞こえた。

「僕の．．．願いは．．．．．」

【お前の願いを叶えてやる。だが、代償は払ってもらおう。】

「ぼ．．．．僕は、永瀬ちゃんを守れる．．．力が．．．．欲しい。」

「

【その願いを叶えよう。．．．代償は貰っていく．．．。】
真っ白だったのが戻ってきた。

ガキイイイイン

目の前に馬みたいな動物が現れた。体は馬、角が生えており、羽も生えている。

「ペ．．．ペガサス！」

僕が考え付いた動物の名前を呼んだ。

【私の名は、ゼウス。お前の契約した神だ】

「ゼ．．．ウス！」

【さあ、命じろ。主よ。】

「そいつを倒せ。」

【了解した。】

会話を交わしてから数分キメラは倒された。

「あ．．．ありえないこうもあっさりと倒すなんて．．．」

「僕も意識が朦朧としていたからわからないんだ。」

「その理由は契約した代償として左腕を持っていかれたのが痛すぎてあまり覚えてないのだ。だが、今はゼウスが左腕を構築している。」

「

「代償は何を払ったの？」

「ひ．．．左腕．．．なんだけど．．．」

信じてくれるか分からないが言っておいた。

「身体を代償としたのか．．．ということは神と契約したの？」

「ゼウス、という神様らしいんだけど．．．」

「その左腕はゼウスが？」

「そうみたい。」

僕は左腕を見た。

「感覚が少しおかしいけどなれるだろう」

「そうなんだ。しかし、遅くなっちゃったね。」

「そうだね。」

あたりは、真っ暗になっていた。

「20時か。」

「契約も出来たし。解散ということでもいいかな？」

「では、又明日。」

第一話 ありえない力（後書き）

この作品は僕が始めて書く作品なので表現などおかしいところがあるかも知れませんが気にしないでください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1448j/>

ありえないリアル

2011年1月26日11時10分発行